

こんにち読書というところ、私たちは目でするものという常識を疑いもしないが、耳でする読書もある。というより、ほんらい読むという行為は音声のものだったのではないだろうか。そのことを思い出させてくれるものに、たとえば白石加代子朗読のCD『雨月物語』（上下、新潮社）がある。上巻は呪文じゆもんのような序文の後、「雨月物語巻之一、白峯」と始まり、「あぶ坂の関守にゆるされてより、秋こし山の黄葉見過しがた……」と作者上田秋成の書いた原文のまま朗読されて、途中どんな現代語訳も、注釈も入らない。しかし、風景も、人物像も、時間の流れ

半歩遅れの読書術



高橋 睦郎

も、くつきりと立っている。とくに崇徳院の御陵の前

古典を耳で読む

原文の力、意味を超える

でも、『枕草子』でも、何

でいっしんに読経する西行に
延への怨みで大魔王と化した院の霊と、これにひるま
ず窘める西行とのやりとり
は、迫真的で息もつかせない。
それは、まず作者の原文の力、そして原文の力を
信頼した朗読者の力だろ

の口説く浄瑠璃に涙を流し、
室町時代、能役者の謡曲に
耳を傾け、鎌倉時代、琵琶法師の語る平曲に
心を傾けてきた。それ以前
に平安時代の後宮で、中宮
や姫宮、時として天皇まで
が、『源氏物語』などの物
語のたぐいを、目は絵巻の

らも、同時に自ら声に出して
音声化し耳から受け入れた
たのではないか。したがっ
て後日享受者から提供者
に、つまり読者から作者に
なつてからも、筆を執りつ
つ声に出して、すくなくと
も胸のうちで声にして、書
き綴ったのではないか、と

でもよい、自ら声に出して
読んでみたらどうだろう。
そのさい一つ一つの言葉の
意味にはこだわらず、まず
口調を楽しむ。その繰り返
しの中から、兼好法師や清
少納言のなまの声が、はる
かな時を越えて聞こえてこ
ないものでもない。(詩人)

う。以上二つの力を信頼する
享受者には、音声は耳から
入ってきて生きた物語とな
る。それは一つ一つの言葉
の意味を超えている。
これは享受者としての私の
特殊事情ではあるまい。

動きに添いながら、耳では
女房の読む声を楽しんでい
た形跡がある。
作者である秋成自身、そ
ういう音声享受の長い伝統
の中で育ち、和漢の古典を
まず耳から吸収したのでは
ないだろうか。のちに文字
を目で読むようになってか

思われる。
古典はとっつきにくい、
という。しかし、たとえば
英語などヨーロッパ諸語と
較べると、日本語は古代こ
のかた文構造の上で変化が
少ない、といわれる。古文
はむずかしいという先入観
はとりあえず棚上げにし
て、『徒然草』